

スーダン滞在経験から ザンビア診療所建設プロジェクトへ

秋田大学医学部医学科3年 宮地貴士



Takashi Miyachi



1997年 東京都生まれ

2015年 秋田大学医学部入学

国境なき医師団の活動を見て、国際的な活動に関心を抱く。その後、「病の“背景”を治療する」という川原尚之先生という言葉に出会い、医師になることを決意。

2016年夏、川原先生が理事長を務め、スーダン共和国で活動する認定NPO法人ロシナンテスの下で研修を受ける。また、大学1年生の頃より国際医学生連盟日本(IFMSA-Japan)のAfrica Village Projectに所属。2017年4月よりプロジェクトメンバーとともに、ザンビア共和国の無医村地区に診療所を建設する取り組み「ザンビア・ブリッジ企画」をスタートさせた。

「ザンビア風お好み焼きを販売して、ザンビアに診療所を建設するぞ！」

掲げられた壮大な目標の実現のために、私たちは斬新な方法で挑戦を続けている。

その根底には初めて上陸したアフリカの国、スーダンでの経験が関わっていた。

スーダンで活動するNPO、ロシナンテスの下での経験から今に至るまでを振り返る。

《未開の地スーダン～人生観が変わる旅～》

「長年のあこがれだったロシナンテスの下で、途上国における医療を学ぶぞ！」

2016年夏、高揚する気持ちを抑えながら私はスーダンへ飛び込んだ。川原先生の話す「病の“背景”を治療する」とは具体的に何を意味するのか。自分の目と耳で体感し将来設計の一助とすることを目指していた。だが、この二週間のストーリーは医療研修という話だけにとどまらない。全てが新鮮なスーダンという土地で五感を解放した私が

感じ、考え始めたのは、ヒトへの根源的な問いであった。「真の幸せとは、豊かさとは何か」

《二週間に及ぶ研修で、途上国における医療を学んだ》

巡回診療や井戸開発に加え、スーダンという国の事情に合った医療機器開発、南スーダン出身の学生との交流事業、病院建設など、ロシナンテスの活動は多岐に及ぶ。ここでは、「疾病を治す」といった狭義の医療ではなく、人生を豊かにするものとしての医療が広がっていた。昨今はスーダン保健省と協力しながら保健システムの構築に取り組んでおり、「川原尚之」という一人の医師だけではなく「このシステムがあるから安心だ！」と、スーダン人が語れる日が来ることを思い描いている。ロシナンテスは現地の人々が自ら回せるシステムを作ることで、最終的には活動地から去ることを目標とする『ロシナンテスモデル』を提唱し、今後も新たな土地へと医療を届けていく。医学生の私は、異国の地スーダンに広がっている医療の可能性に無類の興奮を覚えると同時に、将来は世界中に“医療”を届ける一員となることを決意した。

《スーダン人との出会いが私の途上国に対するイメージを変えた》

途上国での医療について、生活環境を含めた包括的なアプローチが必要だと痛感した旅であったが、それ以上に私の心に焼き付いていることがある。それは『スーダン人との出会い』だ。“お節介”の精神で他人に全力で介入してくる人々。人と人のつながりが強く、うつ病や自殺が起きるような風潮もほとんどない。日本人も見習うべき程のおもてなしの心。幾度となくお茶を振る舞い歓迎してくれた。大らかで寛容な気性。シリア難民をビザなしで受け入れ、

教育や医療サービスを自国民と同様に提供している。

田舎の村ではナイル川に飛び込み、流れ星を浴び、裸足で大地を踏みしめ、無邪気な子供たちと戯れ、村人たちと強い握手を交わす。これら一つ一つが私の中にある、貧困、テロ支援国家、内戦を抱える国、というスーダンに抱いていたステレオタイプを囚らずも打ち壊していった。そして、次の問いとの出会いは必然であった。

《真の幸せとは、豊かさとは何か》

確かに経済的にみればスーダンは途上国であり、貧しい国として定義される。物質主義に走れば、日本は進んだ国であろう。私たちは、スーダンに対して“危険”や“貧困”といったネガティブな面しか知らず、逆にスーダンの人々も日本は“テクノロジー”や“長寿”などといったポジティブな面しか知らない。しかしながらスーダンでは、人と人のつながり、コミュニティの完成度、生きることへの泥臭さという点に置いて、私たちには測りがたい“幸福の物差し”があると感じた。モノにあふれ何でも手に入る社会、限りある中で工夫を凝らしながら利用していく社会。一人一人価値観は異なり、二項対立で考えることはできない。この問いに対する答えもないのであろう。大事なものは、お互いの社会を尊重し学び合えるような関係性だ。

この気づきが現在の私たちの活動の根底にあり、“ザンビア・ブリッジ”に込めた想いでもある。話を私たちの活動に移す。

《一通のメールから始まった壮大な挑戦》

スーダンから帰国後の2016年秋、私が所属する医療系学生団体、国際医学生連盟 日本 (IFMSA-Japan) の下に一通のメールが来た。

「ザンビア共和国にあるマケニ村が診療所を建設しようと取り組んでいる。しかしながら、資金難に陥っているようだ。君たちにできることをしてみないか。」

私がメンバーを代表してマケニ村を訪問することになった。首都から車に揺られること4時間、電気・ガス・水道もない村にたどり着く。そこで暮らしていたのは、スーダンで感じたのと同じような、自然と調和した本来の“ヒト”らしい生活をする素敵な人々だった。どこからともなく集

まり談笑をはじめ、時間の流れを気にしない、のんびりした生活。お互いを理解し、支え合うコミュニティの温かい心。素敵な文化が広がっている一方で、村に診療所はなく、医療を受けるためには、妊婦や老人、病人であろうと4時間かけて歩く必要がある。この現状を変えるべく、村人たち自身が立ち上がり診療所の必要性を訴えたのだ。自分たちで40,000個を超えるレンガを製造し、資金の拠出もやろうと意気込んでいる。彼らの強い思いに突き動かされ、私たちも診療所建設に協力することを決意した。

《活動の軸は、ザンビア風お好み焼きの販売》

診療所建設に必要な資金額は940万円であり、私たちはそのうちの300万円を2年間で集める。不足分は、現地のNGOがその他の団体に助成を呼び掛ける計画だ。私たちが資金を集める手段として選んだのは、ザンビア風お好み焼きを販売すること。ザンビアの主食であるトウモロコシの粉を生地に使い、現地をよく食されているトマトと豆を煮込んだソースをかける。私たちが目指すのはザンビアの文化と援助の交換だ。「ザンビアに医療施設がない」という負の側面だけに目を向けるのではなく、現地の人々の代弁者となり魅力も課題もバランスよく発信していく。企画が立ち上がってから8カ月、お好み焼きは1700食以上販売し、資金も約100万円を集めた。伝える文化の幅も広がり、ザンビアの布を使った手芸品の販売やアフリカ音楽コンサートも開催している。

《大事なことはフォローアップ》

診療所が建てば、村人たちはもちろん、応援して下さっている方々も嬉しいだろう。しかしながら、これまで何もなく村に診療所を建てるという行為は大きな責任を伴う。良かれと思ってやった行為が逆に新たな格差や対立を生み出し、コミュニティの破壊につながってしまうかもしれない。私たちが見えていないデメリットが生じる可能性も否定できない。大事になってくるのは、フォローアップだ。診療所を建てて終わりではなく、マケニ村を長期的に見守ることで無医村地域に診療所を建てるとはどのようなことなのか、メリットと新たに生じる課題に向き合っていく。当面は、日本国内での資金集めに奔走することにな

りそうだが、村人たちとの信頼関係構築、診療所運営に関するザンビア保健省との契約など建設後のことも考えながら、今後も駆け抜けていく覚悟だ。

「ザンビア・ブリッジに込めた想い」

「一方的に支援するのではなく、この活動を通してザンビアからも学べるはずだ！」その漠然とした思いは、確信へと変わりつつある。今までザンビアの名前すら知らなかった人も、日本にいながらザンビアの料理を食べること、さらにザンビアの音楽に合わせて踊ったことで、現地の文

化に親しみを持ってくれた。更に、その方々から他の方々へザンビアの食べ物や文化の魅力が伝わり、支援者のコミュニティは広がってきている。ザンビアをきっかけに、私たちの周りで温かいコミュニティが出来上がってきたのだ。この温かいコミュニティこそ、ザンビアで学び、日本に伝えていきたいと感じたことだ。今後はこのコミュニティの可能性を探りながら、その力を結束して世界に医療を届けて行きたい。

最後になりますが、スーダンの日々から今日に至るまで支えて下さった皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。



村人に話を聞く様子



川原先生とともに



ザンビア風お好み焼き出店の様子



ザンビア風お好み焼き



スーダンでスーフィーダンスを踊った



ザンビアの布から
メンバーが手作りした手芸品